



はと時計 12月号

松蔭中高図書館 2018年12月10日発行
library@shoin-jhs.ac.jp 担当：川村

私たちの身近にあって、毎日必ず飲んでいてという人も少なくないコーヒー。カフェでコーヒーを飲みながら読書を楽しむのが好きという人も多く、コーヒーと本は相性が良いのかもしれませんが。というわけで、今月のはと時計は、コーヒー特集です。



文学とコーヒーのはなし

『作家の珈琲 コロナブックス202』

コロナブックス編集部編 平凡社 2015年

頭を冴えさせ、リラックス効果もあるコーヒーは創作活動に向いています。名だたる作家たちが時に自宅で、時に喫茶店でコーヒーを味わい、たくさんの名作を生み出してきました。そんな作家たちこだわりのコーヒー論をご紹介します。

『小説のゆくえ』筒井康隆著 中公文庫 2006年

星新一、小松左京と並ぶ「SF御三家」の一人と言われる筒井康隆氏。「コーヒーは人間を知的にする大いなる発見だ」と語る筒井氏が自らの経験を語ったエッセー「約1トンのコーヒー」が収録されています。エッセーのタイトルは、筒井氏がこれまでに飲んだコーヒーの量だと自ら語っていますがその真偽の程は…？神戸に自宅がある筒井氏が通う喫茶店についても書かれています。



コーヒーが登場する小説

『珈琲店タレーランの事件簿 また
会えたなら、あなたの淹れた珈琲を』
岡崎琢磨著 宝島社文庫 2012年

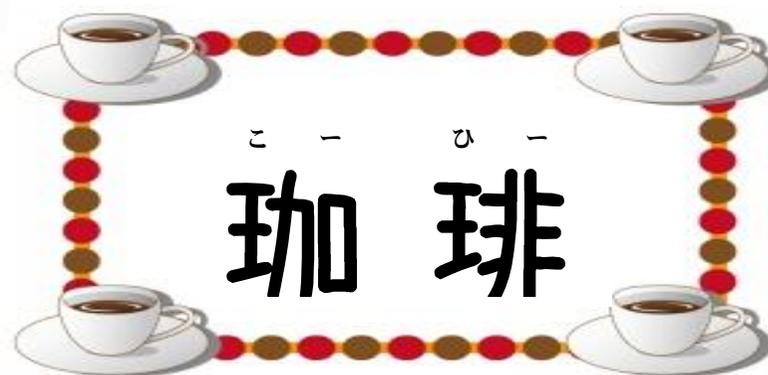
コーヒー好きの主人公がふらりと入った店は、「良いコーヒーとは、悪魔のように黒く、地獄のように熱く、天使のように純粋で、そして恋のように甘い」と言ったフランスの政治家の名を持つ珈琲店「タレーラン」。タレーランの若きバリスタ切間美星が、主人公が持ち込む様々な謎をテンポ良く解き明かしていきます。また、謎解きだけでなくコーヒーの雑学も満載です。

『ブラック・コーヒー 小説版』
アガサ・クリスティ著 中村妙子訳
ハヤカワ・ミステリ文庫 1998年

国の命運を左右する発明をした科学者エイモリー卿。彼は家の者たちを集めて「この中に発明を盗んだ人物がいる」と語っている最中に亡くなってしまう。彼がその時に飲んでいたコーヒーには毒が盛られていた。この事件の真相は一体？探偵エルキュール・ポワロが事件の謎に迫る。

『コーヒー事典
カラーブックス869』
伊藤博著 保育社 1994年

コーヒーの種類から栽培法、歴史、味にいたるまでを網羅した事典。コーヒーそのものだけでなく、おいしくコーヒーを淹れるための器具やコーヒーカップがどのように発展してきたのかも分かりやすく解説されています。



『世界を変えた6つの飲み物 ビール、ワイン、蒸留酒、コーヒー、紅茶、コーラが語るもうひとつの歴史』トム・スタンダージ著 新井崇嗣訳 インターシフト 2007年

世界史を飲み物から考えた一冊。「コーヒー」の項では、アラビアからヨーロッパに伝わったコーヒーが、社交、商業、知的活動の新たな場として「コーヒーハウス」を生み、そこでやりとりされる情報が歴史を動かしてきたと述べています。その流れは現代の世界的なコーヒーチェーン、スターバックス・コーヒーまで続いているそうです。

神戸とコーヒーのはなし

明治初期に日本で初めてコーヒーを出した店は、元町に現在もある日本茶店「放香堂」だという説があります。それ以降、神戸の街にはコーヒー文化が根付き、脈々と受け継がれてきました。神戸コーヒーの歴史と今をのぞいてみましょう。

『神戸カフェ物語 コーヒーをめぐる環境文化』
神戸山手大学環境文化研究所編

神戸新聞総合出版センター 2003年

開港以来のコーヒー文化が息づき、今もたくさんのカフェがある神戸。そんな神戸のカフェやコーヒーショップを分析。神戸でどのようにコーヒー文化が育まれてきたのかが分かる一冊です。コーヒーとともに愛されてきた「ユーハイム」などの洋菓子の歴史にも注目です。

『工場を歩く ものづくり再発見』加藤正文著
神戸新聞総合出版センター 2005年

世界で初めて缶コーヒーを開発したUCC上島珈琲は日本最大のコーヒーメーカーで、その本社は神戸にあります。本書ではUCCの缶コーヒー工場が紹介されていて、いつでもどこでも手軽に飲むことができる缶コーヒーの舞台裏に迫っています。開発秘話も必見です。

『ひょうごのロングセラー100 のじぎく文庫』

神戸新聞経済部編 神戸新聞総合出版センター 2016年

兵庫県のさまざまなロングセラーの中から神戸の喫茶店「にしむら珈琲」が紹介されています。おいしさの秘密は神戸でしか手に入らない「水」にあるのだとか。



カフェのはなし

『ブックカフェものがたり 本とコーヒーのある店づくり』矢部智子、

今井京助ほか著 幻戯書房 2005年

最近よく見かけるようになったブックカフェ。全国のブックカフェ9店のオーナーに取材し、本とコーヒーのふたつを同時に楽しめるこだわりの空間づくりを紹介しています。コーヒー片手に読書を楽しみたくする一冊です。

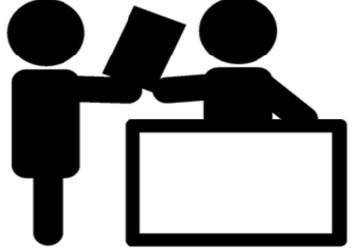
『京都・大阪・神戸の喫茶店 珈琲三都物語』
川口葉子著 実業之日本社 2015年

関西を代表する3つの都市である京都・大阪・神戸。それぞれ個性豊かな町ですが、喫茶店文化も町の個性に合わせて古くから発展してきました。店ごとのコーヒーの特色なども紹介されていて、楽しく読むことができます。近所のあの店の秘密もわかるかも。

「コーヒーの「は」知識

今年の一冊

毎年恒例、司書が選んだ今年の一冊です：



『森のノート』
酒井駒子著 筑摩書房 2017
今年、大好きな絵本作家さんの酒井駒子さんといわむらかずおさんにお会いすることができました。酒井駒子さんは、この度初めてお顔を拝見したのですが、とてもかわいらしくすてきな方で、ますますファンになってしまいました。そのときに購入しサインをいただいたこの本を今年の一冊に。東京から2時間ほどの山の中のアトリエで過ごす日々を書き記したエッセイで、エピソードひとつひとつがとてもかわいく、実際に酒井駒子さんのお顔を拝見してからだと、余計にそう感じました。酒井さんの美しい言葉とイラスト、山の中の風景がとても魅力



的な1冊。今月から阪急うめだ本店で開催される【MOE創刊40周年記念 島田ゆか・酒井駒子・ヒグチユウコ・ヨシタケシンスケ・なかやみわ 5人展】にももちろん行く予定です♪ (川内)



今年「本」に関する本をよく読んだ1年でした。なかでも、本がどのようにつくられているかを考えさせてくれたのが『本のエンドロール』安藤祐介著 講談社 2018です。作家の書いた原稿が私たちの手に届くまで、一体どれだけの工程があり、どんな人が関わっているのでしょうか。1人1人が自分の仕事を全うし、地道な作業を重ねてようやく1冊の本が出来上がる。より良い本をつくる！つくるからにはより多くの人に届けたい！という意気込みが伝わってきました。「エンドロール」とは本来映画などの最後に流れるクレジットのことですが、本でいうならば奥付。この本のエンドロールは、とても素敵

仕上がりです。読んだあと是非確認してみてくださいね。(高田)

『ナマズの博覧誌 生き物文化誌選書』
秋篠宮文仁 緒方喜雄 森誠一 編著 誠文堂新光社 2016

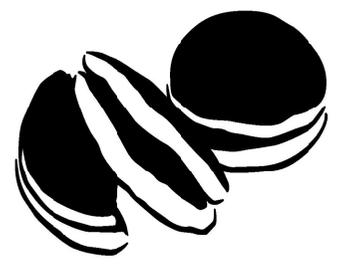
今年8月、東海地方などに生息するナマズの種類が、新種と認定されたそうです。川の生き物が好きな私にとっては、大きなニュースのひとつでした。というわけで今年の一冊は、ナマズの本です。ナマズをモチーフにした古い伝説から、現代のゆるキャラまでたくさん紹介されていて、人の暮らしのすぐそばで生きてきた魚だということがよく分かります。今でも彼らは町中の川や田んぼの用水路などの身近な環境に棲んでいます。その存在を気にかける人は少なくなっているのかもしれない。この本は、



身近な生き物や自然環境に関心を持つきっかけになると思います。

それにしても、私たちのすぐそばに新種の生き物がいて、誰でも発見者になれるかもしれないって夢があると思いませんか？ (川村)

今年亡くなった人といえはさくらももこ、ル=グウィン、かこさとしと大物ばかりですが、私は誰よりも樹木希林さんでした。2003年に左目が失明、全身痛になってもなお延命治療はせず「おごらず、人と比べず、面白がって平気に生きればいい」と生きた女優。来年は彼女の飄々としたフジカラーのCMは見られないのが残念でならない。彼女が出演している「万引き家族」が今年のカヌ映画祭グランプリを取りましたが、私は映画『あん』ドリアン助川著 ポプラ文庫 2015 を挙げたい。売れないどら焼き屋にふらりと現れた魔法のようなあんこをつくりだす老女。彼女は残酷にも50年も家族から引き離され、自由になってもまだ孤独だった。それでも日々を生きる価値があると信じ、人を信じて生きていこうとした役柄は、希林さん自身のやさしさ強さに裏打ちされ、とても説得力ある映画になっていました。泣ける映画、などと軽々しく言いたくない、いとおいしい作品。原作もハンセン氏病患者の不当な待遇が切なく、読む価値がありました。(眞鍋)



映画原作では「来る」の『ぼぎわんが、来る』澤村伊智著 角川ホラー文



庫2018、『スマホを落としただけなのに』志駕晃著 宝島社文庫2017、『マスカレード・ホテル』東野圭吾著 集英社文庫2014、『人魚の眠る家』東野圭吾著 幻冬舎文庫2018、『日是好日』森下典子著 新潮文庫 2008、『フォルトゥナの瞳』百田尚樹著 新潮文庫 2015、『Merry Christmas! ロンドンに奇跡を起こした男』の種となった『クリスマス・キャロル』ディケンズ著 光文社古典新訳文庫2006ほか、『輪違屋糸里』上・下 浅田次郎著 文春文庫 2007、『こんな夜更けにバナナかよ』渡辺一史著 北海道新聞社 2003。

またテレビドラマ化された岡田将生の好演も話題の『昭和元禄落語心中』東芙美子著 講談社文庫2018、抽選でお見合い相手が決められてしまう『結婚相手は抽選で』垣谷美雨著 双葉文庫2014 所蔵しています。

先月行われた西日本豪雨の被災者のためのチャリティブックセール 全部で6,340円

の売上げがありました。全額、宗教部を通じて豪雨災害の被災者支援をしているボランティア団体に寄付しました。ご協力ありがとうございました。

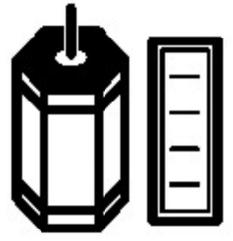


だだいま冬休み貸出 実施中 10冊まで借りられる！ 冬休み開館予定

12月25日(火)・26日(水) 9:15~16:45 (年末年始閉館)

1月7日(月) 9:15~16:45 1月8日(火) 始業式 通常開館

年始から読書みくじはじめます。資料を借りておみくじひいて、新年の読書運を占いましょう。ささやかなプレゼント付。



2018年12月10日発行
松蔭中高図書館広報誌
はと時計第208号
松蔭中高図書館発行
〒657-0805
神戸市灘区青谷町3-4-47
library@shoin-jhs.ac.jp